

※録音時に応募名を名乗ってください。

岡本かの子 作「愛よ愛」

この人のうえをおもうときにおもわず力が入る。この人とのくらしに必要なわずらわしき日常生活もいやな交際も覚束なきままにやっつてのけようとおもう。この人のためにはすこしの恥は涙を隠しても忍ぼうとおもう。

朝夕見なれしこの人、朝夕なにかしら眼新らしきものをその上に見出すこの人。世間ではこの人をおとなのなかのおとなのよういう。けれどもわたしにはこどもに見える。というわたしをこの人はまだこどものように見てなにかと覚束ながる。互に眼を睜目って、よくぞこのうき世の荒浪に堪うるよと思う。

おいおいたがい無口になって、ときには無口の一日が過ぎられる。けれども心のつながりの無い一日では無い。この人が眼で見よと知らする庭の初雪。この人が耳かたむける軒の雀にこのわたしも――。  
むかし、いくたりの青年が、この人に競い負けてわたしのまわりから姿を消したことであろう。おもえば相当に、罪を担うて居るこの人

である。けれどもこの人の、いまの静けさに憎みを返す人があろうか。この人のわたしを庇い通した永い年月を他所ながら眺めてその人達も恨をおさめて居るに相違あるまい。もういくたりの兎の父となつて。もし逢つてもその人達はこの人になつかしく差出す手を用意して居るに相違ない。そういえばわたしとてよくもこの人を庇い通した——おもえば氷を水に溶く幾年月。その年月に涙がこぼれる。

和服を着せれば幾日でもおとなしく和服を着ている。洋服を着せれば黙つて洋服を着て居る。この人はまるで阿呆のようだ。そのくせわたしの着物にはいろいろと世話をやく。あらい柄のものをわたしが着さえすれば悦んで居る。ときには少女が着でもするような派手な着物を買つてさえ来る。わたしは訊く「どうしてこんなものを」この人は答える「うちには娘が無いからお前に着せる。でないと、うちのなかに色彩がなくて淋しい」

いくら忠告してもこの人がたった一つよこさないものはフランス製の西洋寝巻だ。洋行からわたし達がかえるとき巴里に置いて来たこどもが訣れしなに父のこの人を買つて呉れた寝巻だ。厚いラクダの毛。これをこの人は夏冬なしに寝巻に着る。夏は毒ですよ、といつてもききはしない。そして枕につくとき云う「こどもはどうして居る

かな」

子を思えばわたしとても寝られぬ夜々が数々ある。わたしという  
覚束ない母が漸く育てた、ひとりのこども。わたしに許しを得て髪  
を分けたこども、一しよに洋行したこども。おとなびてコーヒーに入  
れる角砂糖の数を訊いて呉れるこども。フランスからひとりで英国  
のわたし達に逢いに来たこども。パリでは手を握り合ってシヤリア  
ピンに感心したこども。置いて日本へかえってから寄越す手紙ば  
かりを楽しみにして居るわたし達、冬の灯ともす頃はことさら巴里  
の画室で故郷をおもうと書き寄越した手紙を読んだわたしは直ぐに  
もこの人を起こす。いつも寝入ればなかなか起きないこの人がたや  
すく起きる。そして涙ぐみつつふたり茶をのむ夜ふけ——外にはか  
すかな木枯の風。